

## 断り表現に関する日韓対照研究の動向

河 正一・徐 明煥

### 【キーワード】

ポライトネス、インポライトネス、利益の対立と衝突、フェイス侵害行為、異文化理解、意味公式、ストラテジー、負荷の度合い

### 【要旨】

本稿では、断り表現に関する日韓対照研究の動向を概観し、調査方法及び調査内容について研究方法の妥当性や問題点の検証などを試みた。断り表現のアプローチには、断り表現に用いられる言語形式の相違点に焦点を当てた言語形式的アプローチ、断り表現における社会的・文化的背景との関係に焦点を当てた社会言語学的アプローチ、そして第二言語習得における学習者の中間言語語用論に焦点を当てた言語教育学的アプローチが見られた。

しかし、従来の研究では、断り表現を相手に対するフェイス侵害行為への補償行為として捉えていたため、ポライトな言語ストラテジーとしての断り表現に偏っている。断り表現の本質は、互いの利益の対立と衝突に動機づけられたフェイス侵害行為として現れるインポライトネスであり、今後インポライトネスの観点を取り入れた研究が必要不可欠であろう。

### 1. はじめに

科学の進歩は、世界のグローバル化に拍車をかけ、人々の異文化間交流の機会をより一層、増加させるに違いない。しかし、そこには当然ながら互いの異なる言語トラブルや異文化摩擦の危険性が潜んでいる。円滑かつ効果的なコミュニケーションの遂行は、互いの異文化に対する理解が求められるが、異文化理解への糸口となるのが言語文化における社会言語学的観点からの研究であろう。

こうした時代の変化と要求に伴って、2000年代に入ってから異文化理解に対する言語教育が注目を浴びるようになり、日韓対照研究では、多岐にわたった社会言語学観点からの研究が行われるようになってきた。

そこで、本稿では、様々な社会言語学的観点からの研究のうち、断り表現を中心に日韓対照研究の研究動向を概観し、検討を行うことを目的とする。

以下、2節は、断り表現に関する日韓対照研究のアプローチを概観する。3節では、調査方法と調査内容に分けて詳細に分類し、研究方法の妥当性や問題点などについて、論じていく。

## 2. 断り表現に関する日韓対照研究のアプローチ

これまでの断り表現に対するアプローチの特徴を分類すると、以下の通りとなる。

- (Ⅰ) 言語形式的アプローチ
- (Ⅱ) 社会言語学的アプローチ
  - (1) 負担の度合いとしてのアプローチ
  - (2) 意味公式もしくはストラテジーとしてのアプローチ
  - (3) ポライトネスとしてのアプローチ
  - (4) 非言語行動としてのアプローチ
- (Ⅲ) 言語教育学的アプローチ

(Ⅰ) 言語形式的アプローチは、言語形式に重きを置いた研究方法として、断り表現に用いられる言語形式の相違点に注目した研究である(任炫樹 2002a、2004b、2012、元智恩 2003 など)。例えば、元智恩(2003)は、断わる場面で用いられた文末表現「ノダ」文と韓国語の文末表現「것 같다」(geos gata)文がどのような印象をもたれるかについてそれらのつかない文と比較分析している。

断り表現における社会的・文化的背景との関係に焦点を当てた(Ⅱ)社会言語学的アプローチは、調査目的によって4つのアプローチが見られる。(1)負担の度合いとしてのアプローチは、断り表現における負担の度合いに焦点を当て、依頼や勧誘の内容がどの程度、依頼や勧誘される人にとって、負担となるかという観点からの研究である(李先敏 1999、2001、이현정 2011a、2011b、2012 など)。이현정(2011b)は、「車を貸してほしいと頼んだ場合」と「お金を貸してほしいと頼んだ場合」の2つの場面を取り上げ、各場面を「個人的に立てた原則および心理的な理由で断られる場合」と「回りの状況および自分の能力不足で断られる場合」に分けて、断る立場ではなく断られた際に感じる不愉快さを分析している。

(2)意味公式<sup>2</sup>もしくはストラテジーとしてのアプローチは、良好な対人関係を維持するために用いられる断り表現の言語ストラテジーに焦点を置いた研究である(元智恩 2002、2005、洪珉杓 2007、임영철・김윤희 2010、김정현 2013 など)。임영철・김윤희(2010)は、大学の先生から「明日、留学生歓迎会があるんだけど、もし時間があったら案内係りをお願いできるかな」という依頼をされたらどのように断るかについて、比較している。

<sup>1</sup> 分析に用いた論文は、主に論文検索サイトの CiNii (日本) と RISS (韓国) の論文を対象とした。文献の書き方として、一般的に日本は、苗字のみを、韓国ではフルネームを用いるため、日本人研究者は苗字のみを、韓国人研究者はフルネームで示す。そして、韓国で刊行された論文には、刊行年度に下線を引いて区別する。

<sup>2</sup> 意味公式とは、人がものを断るときに用いる言葉を、その意味内容によって分類したものである(生駒・志村 1993: 44)。

(3) ポライトネスとしてのアプローチは、断り表現を相手のフェイス<sup>3</sup>に対する配慮として捉えた研究である(任炫樹 2004a、権英秀 2007 など)。任炫樹(2004a)は、「食事の勧誘」「翻訳の進め」「英会話カセット・テープ購入の勧誘」の状況に対し、断り談話においてポジティブ・ポライトネス・ストラテジーがどのように現れるかを「量的・質的差異」「ウチ・ソト・ヨソによる差異」「男女差」という観点から分析している。

(4) 非言語行動としてのアプローチは、ことばそのものによる伝達ではなく、視線、表情、身振りなどといった非言語行動に焦点を当てた研究である(任炫樹 2002b、2005、김정현 2014 など)。任炫樹(2002b)によれば、日本人は断るとき、アイ・コンタクトを気にするが、韓国人はあまり気にせず、相手を見て意見を表明する頻度の割合が高い。そして、話がより深刻化すればするほど相手の顔を見ることをできるだけ避けようとする傾向があるという仮説は、日本人には当てはまるものの韓国人には必ずしも当てはまらないという。

(Ⅲ) 言語教育学的アプローチでは、第二言語習得における学習者の中間言語語用論<sup>4</sup>に焦点を当てた研究である(目黒 1994、1998、藤森 1995、金潤淑 2005、申媛善 2013、吉田 2014 など)。目黒(1994)は、中国人留学生 11 名、台湾人留学生 10 名、韓国人留学生 13 名を対象に、日本人が多く使う断り方の「謙遜型」の会話のテープを聞かせ、理解度と対応の仕方を比較する実験を行い、日本人と比較して韓国人は「謙遜型」への理解度が低く、中国人は依頼をやめるのが早いと指摘している。

### 3. 研究動向の分析

本節では、主に調査方法と調査内容に分けて研究方法の妥当性や問題点などについて、論じていく。研究動向の分析に用いた論文は合計 28 本であり、それらの調査方法を分類すると、以下の通りとなる。

<sup>3</sup> Brown & Levinson (1987) は、社会の成員は皆ある種の基本的な欲求、すなわちネガティブ・フェイス (negative face) とポジティブ・フェイス (positive face) を持っているとする。ネガティブ・フェイスとは自分の行動が他人によって干渉されてほしくないという欲求であり、ポジティブ・フェイスとは自分が大切にしている物や価値や行動などを他人によって理解されたり高く評価されたいという欲求である。この二つのフェイスを脅かすような行動がフェイス侵害行為 (Face-threatening Acts) であり、フェイス侵害行為の度合いが高くなればなるほど、よりポライトなストラテジーが必要になると捉えている。つまり、Brown & Levinson (1987) は協調の原理に違反する行為者の動機づけをフェイス侵害行為の軽減というポライトネス理論から求めている。

<sup>4</sup> 中間言語語用論とは、非母語話者である第二言語や外国語の学習者 (特に、区別する必要がない限りまとめて「第二言語学習者」と呼ばれる) が、実際にことばが使われる文脈の中で伝達、理解される意図や意味に関する第二言語の知識をどのように使用するのか、またそうした知識をどのように習得していくのかを解明する分野だと言える (清水 2009 : iv)。

## ①教材分析

| 論文               | 調査対象                     | 調査内容                   |
|------------------|--------------------------|------------------------|
| 아오키사야카<br>(2012) | 日本語教材 48 冊<br>韓国語教材 32 冊 | 「依頼」および「勧誘」に対する断り表現の分析 |

## ②意識調査

| 論文          | 調査対象                              | 調査内容  |
|-------------|-----------------------------------|---|
| 李先敏 (1999)  | 日本人 50 名<br>韓国人 50 名<br>大学生       | 時間的・能力的に可能だが、やりたくないとき、すなわち「英文の手紙を翻訳してほしい」と「本を貸してほしい」という断りの分析                      |
| 李先敏 (2001)  |                                   | 時間的・能力的に不可能なので、引き受けるのがはばかれる場面、すなわち「英文の手紙を翻訳してほしい」と「本を貸してほしい」という断りの分析              |
| 元智恩 (2003)  | 日本人 95 名<br>韓国人 106 名<br>大学生・大学院生 | 「学生 A が教官からの引っ越しの手伝いの依頼を断わる」と「学生 A が友人からの引っ越しの手伝いを断わる」という 2 つの断る場面で用いられた文末表現の比較分析 |
| 이현정 (2011a) | 日本人 46 名<br>韓国人 48 名              | 「プライバシー」「好み・趣向」「時間・スケジュール」「お金・物」の 4 つの素材と相手との利益関係の分析                              |
| 이현정 (2011b) | 日本人 230 名<br>韓国人 235 名            | 「ドライブのために明日一日だけ車を貸してもらえないかと頼んだ場合」「お金を貸してもらえないかと頼んだ場合」断られた際に感じる不愉快さの度合いの分析         |

## ③談話完成テスト

| 論文                  | 調査対象                              | 調査内容  |
|---------------------|-----------------------------------|---|
| 元智恩 (2002)<br>録音による | 日本人 95 名<br>韓国人 106 名             | 「指導教官に研究室の引越しの手伝いを頼まれたが、時間的・能力的に手伝うことが可能であるが、なんとなくやりたくないから断る場面」の分析                      |
| 元智恩 (2005)<br>録音による | 日本人 95 名<br>韓国人 106 名<br>大学生・大学院生 | 「親しい指導教官および親しくない指導教官から研究室の引越しの手伝いを頼まれたが、断わる場面」と「親しい友人及び親しくない友人から引越しの手伝いを頼まれたが、断わる場面」の分析 |
| 임영철・김윤희<br>(2010)   | 日本人 99 名<br>韓国人 99 名<br>大学生・大学院生  | 「明日、留学生歓迎会があるんだけど、もし時間があつたら案内係りをお願いできるかな」という場面における断りの分析                                 |

## ④意識調査＋談話完成テスト

| 論文                        | 調査対象                                | 調査内容  |
|---------------------------|-------------------------------------|---|
| 目黒 (1994)<br>その上、インタビュー調査 | 日本人 38 名<br>韓国人留学生 13 名             | 「日曜日の留学生パーティーでスピーチを依頼された場合」における「謙遜型」の会話のテープを聞かせ、理解度と対応の仕方の分析                    |
| 目黒 (1998)                 | 日本人 57 名<br>韓国人 62 名<br>韓国人学習者 89 名 | 「送別会の司会をするように頼まれた。引き受けるのは可能であるが、やりたくない場合」依頼者の上下や親疎による意識およびストラテジーの分析             |
| 洪珉杓 (2007)                | 日本人 263 名<br>韓国人 326 名<br>大学生       | 「考えておく」に対する意識調査および「依頼に対する断り場面 3 つ」「勧誘に対する断り場面 1 つ」「提案に対する断り場面 1 つ」における断りの分析     |
| 이현정 (2012)                | 日本人 230 名<br>韓国人 235 名              | 「ドライブのために明日一日だけ車を貸してもらえないかと頼んだ場合」「お金を貸してもらえないかと頼んだ場合」2 つの依頼の負担の度合いとストラテジーの違いの分析 |

## ⑤ロールプレイ

| 論文                               | 調査対象                             | 調査内容  |
|----------------------------------|----------------------------------|---|
| 任炫樹 (2002a)                      | 日本人 30 名<br>韓国人 30 名<br>大学生・大学院生 | 「食事の勧誘」「翻訳の進め」「英会話カセット・テープ購入の勧誘」における断り談話の開始に見られるあいづちマーカーの分析     |
| 任炫樹 (2004a)                      |                                  | 任炫樹 (2002a) の調査をポジティブ・ポライトネス・ストラテジーという観点からの分析                   |
| 任炫樹 (2004b)                      |                                  | 任炫樹 (2002a) の調査を断り談話における理由表現マーカーという観点からの分析                      |
| 任炫樹 (2012)                       |                                  | 任炫樹 (2002a) の調査を断り談話における不可表現マーカーという観点からの分析                      |
| 金潤淑 (2005)<br>電話による              | 日本人 5 件<br>韓国人学習者 7 件            | 「一週間後に開かれる、座談会に代わりに参加してほしい」に対する断りを<文末のモダリティ>と<発話機能>との二つの観点からの分析 |
| 権英秀 (2007)<br>ロールプレイ＋<br>談話完成テスト | 日本人 50 名<br>韓国人 42 名<br>大学生      | 「家族である兄・姉と親しい先輩からの「物の買い出し」に対する「断り」表現を「意味公式」と「ポライトネスのフェイス」からの比較  |

## ⑥ テレビドラマ

| 論文          | 調査内容  |
|-------------|---|
| 任炫樹 (2002b) | 勧誘・依頼を断る際に見られるアイ・コンタクトの分析   |
| 김정현 (2013)  | 提案、頼み、勧誘の場面で現れる断り表現を意味公式を用いて断り表現の類型および理由のマーカートの分析                 |
| 김정현 (2014)  | 「勧誘」と「頼み」の場面において、断りへの負担によるアイ・コンタクトの現れ方の分析                         |
| 金楨憲 (2014)  | 頼み、勧誘、提案の3つの場面で現れる「断り表現」の「理由表明」を私的・公的理由に分類し、さらに親疎関係における理由表明の分析    |
| 김정현 (2015)  | 間接的な拒絶表現を、faceを基準にして聴者中心の「婉曲表現」と話者中心の「婉曲表現」に分けて、各々の断り表現のストラテジーの分析 |
| 元智恩 (2016)  | 依頼に対する断わりと勧誘に対する断わりの特徴の分析   |

## ⑦ メール

| 論文             | 調査対象                    | 調査内容  |
|----------------|-------------------------|---|
| 申媛善 (2013)     | 日本人 15 名<br>韓国人学習者 30 名 | 「日本人の同性、同世代の友達からコンサートに誘われたが、あなたはこのコンサートにあまり興味がなく、行きたくない場合、相手を怒らせたり傷つけないよう、断りのメールを書く」という調査 |
| 金楨憲・崔淑伊 (2012) | 携帯メール 20 件<br>韓国人学習者    | 「今日、映画見に行かない？」という誘いに対する断りの意味公式の分析   |

## 3-1 調査方法

断り表現における調査方法は概ね上記の7つに分類することができる。調査方法の選択は、調査対象や調査目的、時間、費用などを総合的に考慮しなければならないため、最も適切な調査方法とは何かについて、一概には言えない。例えば、あらかじめ用意された質問項目に対する意識調査は、プリコード回答法<sup>5</sup>が採用されやすく、特定の状況における言語ストラテジーの調査では、談話完成テストやメールなどといった自由回答法が採用されやすい。また、より自然な会話の収集に焦点を置く場合は、ロールプレイが用いられやすいものの、時間的・費用的な問題点から比較的に手に入りやすいテレビドラマの調査方法が好まれる場合もある。

しかし、上記の調査方法には2つの問題点が見られる。1つは、調査対象が大学生・大学院生に偏っているという点である。このことは、10代後半から20代の大学生・大

<sup>5</sup> プリコード回答法の「プリコード」とは、「予想される回答内容を回答選択肢としてあらかじめ用意しておき、それぞれの回答選択肢に符号(コード)をつけておく」という意味である。したがって、プリコード回答法では、質問文とともに示した回答選択肢の中から、該当する回答選択肢を選んでもらうことになる(辻・有馬 1987: 73)。

大学院生を調査対象にした研究は豊富であるが、他の年代・性別における研究は乏しいということの意味する。こうした傾向はおそらく研究者にとって時間的・費用的に最も効率よく調査ができる対象が大学生・大学院生であるためであろう。

もう1つは、調査目的に対する標本数の考慮である。例えば、이현정 (2011a) では、39個の質問項目について日本人46名（男24名、女22名）と韓国人48名（男24名、女24名）を対象に断り場面における意識調査を男女別および年代別（20～50代）に分けて調査している。しかし、この場合は質問項目が39個に比べて標本数が少ないため、精度が悪くなり、男女別および年代別での比較も意味がなくなってしまう。

では、どれ位の標本数が適切であろうか。辻・有馬（1987：121-124）は、意味のある推定をしようとする、少なくとも100程度の標本数が必要となり、このことはグループ別の分析においてもそれぞれのグループで少なくとも100以上が必要であるという。一方、佐竹（2001：82）は、調査量とサンプリングの決定は、過去の類似調査の例などを参考にして、自分なりに工夫した調査を繰り返すしかない。計量的な調査ではどんなに調査量を多くしても、どんなに厳密にサンプリングをしても、その結果が絶対的なものではないという。

標本数の決め方には<sup>6</sup>、信頼性係数や母分散など様々な要因が考慮されるが、質問項目と関連して偏りのない調査を行うためには質問項目の3~4倍以上の標本数が必要ではないかと思われる。すなわち、得られたデータを分析し、統計的に妥当な検証や解釈を行う量的アプローチでは、その根拠となるある程度の標本数を確保しなければならない。

### 3-2 調査内容

調査内容に焦点を当てて詳細にみると、依頼や勧誘、提案などの場面に対する断る側の分析が大半を占めている（元智恩 2002、洪珉杓 2007、임영철・김윤희 2010、申媛善 2013 など）。例えば、임영철・김윤희 (2010) は、日韓の大学生及び大学院生（日本人99名、韓国人99名）を対象に、大学の先生から「明日、留学生歓迎会があるんだけど、もし時間があったら案内係りをお願いできるかな」という依頼をされたらどのように断るかについて、調査を行っている。

その上、断り表現の焦点、すなわち「能力の有無」「対人関係」「負荷の度合い」の要因と関連した分析が多く見られる。例えば、李先敏（1999、2001）は、「時間的・能力的に可能だが、やりたくない場合」と「時間的・能力的に不可能なので、引き受けるのはばかれる場合」すなわち、断る側における「能力の有無」に焦点を当てている。また、元智恩（2003）は、「学生Aが教官からの引っ越しの手伝いの依頼を断わる」と「学生Aが友人からの引っ越しの手伝いを断わる」という2つの断る場面、すなわち、対人関係と関連した断り表現の調査に重きを置いている。そして、이현정 (2011a) は、断りの

<sup>6</sup> 標本数の決め方については、辻・有馬（1987：122）における標本数を決定するための公式を参照されたい。

対象として「プライバシー」「好み・趣向」「時間・スケジュール」「お金・物」という4つの素材、すなわち負荷の度合いに注目して分析を行っている。さらに、이현정 (2012) では、断り表現における「能力の有無」「負荷の度合い」の要因が「対人関係」においてどのように現れるか、すなわちそれぞれの要因を考慮した調査が行われている。

一方、断られる側の観点からの分析は、断られた際に感じる不愉快さに焦点が置かれる。이현정 (2011b) は、「ドライブのために明日一日だけ車を貸してもらえないかと頼んだ場合」と「お金を貸してもらえないかと頼んだ場合」を心理的・原則の理由と状況および能力不足の理由で断られた際に感じる不愉快さの度合いに焦点を当てている<sup>7</sup>。

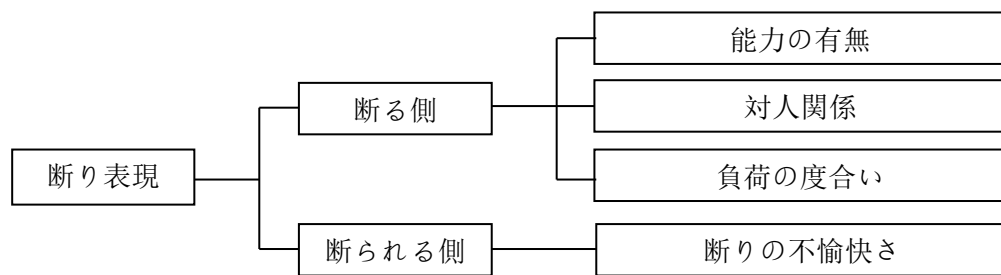


図1. 断り表現の調査内容の焦点

以上、調査内容に焦点を当てると、図1のようにまとめることができる。しかし、ここには2つの問題点が見られる。1つは、相互行為としての言語行為の分析では、話し手の言語ストラテジーだけでなく、語用論的效果として現れる聞き手の判断や印象も重要な研究対象となる。ところが、従来の研究はポライトネスにおける補償行為としての断り表現に焦点を当てた断る側の研究に偏っている。言語行為は自己と他者の相互行為として現れ、一回で済むわけではなくキャッチボールに喩えられるように互いの発話に基づき、さらに発話を重ねて進行していく行為である。ゆえに、断る側に焦点を当てた分析だけでなく、断られる側の解釈過程や断り表現に対する互いの反応など、談話参加者間の相互行為としてのアプローチが必要である。

もう1つは、上記の問題点とも相通じる。そもそも相互行為における断る言語行為とは何か、なぜ、相手の依頼を断るか、という断り表現の本質の観点があまり考慮されていない点である。「断る」ということは、相手の依頼や申し出に対して「できない」という意向を示す行為である。では、断る言語行為の動機付けは何であろうか。当然、断る理由には時間的・物理的にできない、面倒くさい、親しくない、興味がないからなど、様々な理由が考えられるが、その根底は互いの利益の対立と衝突として現れ、断る行為自体

<sup>7</sup> しかし、「車を貸してほしい」という依頼が果たして両国の言語文化におけるフェイス侵害行為として現れる負荷の度合いが等しいだろうかという疑問が残る。つまり、同一の言語行為であっても、両言語文化における負担の度合いが必ずしも一致するとは限らないという点も考慮しなければならない。



は相手の依頼や申し出を受け入れないフェイス侵害行為である。ゆえに、断り表現には相手のフェイスに対する補償行為としての多様なストラテジーが用いられるわけであり、ほとんどの研究がこの捉え方から出発している。

ところが、こうした捉え方はあくまでもポライトネスの観点しか反映されてないと言わざるを得ない。断り表現の本質は、互いの利益の対立と衝突に動機づけられたフェイス侵害行為として現れるインポライトネス<sup>8</sup>の1つである。ということは、攻撃的かつ批判的、時には感情的な断り表現としてのインポライトネス・ストラテジー、例えば、相手の依頼に対して「なぜ、私が手伝わなければならない?」「私とは関係ない」なども考えられる。つまり、インポライトネスの観点から断り表現を捉えようとするアプローチが反映されてない。

インポライトネスとしての断り表現の軸は、対人関係におけるフェイス侵害行為としての負荷の度合いと利益の対立と衝突にある。利益はわれわれの言語行為の根源的な動機付けの1つであり<sup>9</sup>、談話参加者間にとって今後、利益になり得る依頼や申し出は多少、負担の度合いが多くても受け入れやすく、反対に負担の度合いが低くても今後利益になり得ない依頼や申し出は受け入れにくくなるであろう。すなわち、利益が断り表現に及ぼす影響は非常に大きい。

それにもかかわらず、利益の対立と衝突の度合い考慮した観点からの研究があまり見られない。勿論、李先敏（1999、2001）では、依頼に対するフェイス侵害行為としての負荷の度合いが考慮されているものの、その負荷の度合いのバランスや依頼の内容が被験者の利益と関連してどのように現れるかという観点が不足している。すなわち、断り表現における「対人関係」と「負荷の度合い」の要因のみならず、「利益」の要因がもたらす影響を含め、さらに総合的に考慮した分析が行われるべきであろう。

以上、調査内容に焦点を当てて詳細に論じた。従来の研究では、断り表現を相手に対するフェイス侵害行為への補償行為としての捉え方であり、このことは、ポライトな言語ストラテジーとしての断り表現の研究への偏りをもたらしたと言えよう。断り表現の本質は、互いの利益の対立と衝突に動機づけられたフェイス侵害行為として現れるインポライトネスであり、今後インポライトネスの観点を取り入れた研究も必要であろう。

---

<sup>8</sup> 河（2014）では、Brown & Levinson（1987）のフェイス概念を「相互行為における互いの行為者が打ち出した社会的価値としてのフェイス」として捉え直し、行為者の社会的価値の獲得としての働きかけが相互行為におけるフェイスの衝突を生み出すとする。ゆえに、ポライトネスは相互作用における合理的な利益獲得の言語行動である一方、インポライトネスは利益獲得の衝突として現れる言語行動であるという。本稿におけるポライトネスとインポライトネスの捉え方は、河（2014）に基づく。

<sup>9</sup> 筆者は、相互作用における言語行為の選択と解釈に影響を及ぼす社会的要因、すなわち言語行為の動機づけとして「力関係」「社会的距離」「利益」を考えている。詳細は河（2013：67-69）を参照されたい。

#### 4. 終わりに

日韓対照研究では、多岐にわたって社会言語学観点からの研究が行われてきた。そのうち、本稿では、断り表現を中心に研究動向を概観し、検討を行った。断り表現のアプローチにおいては、大きく分けて断り表現に用いられる言語形式の相違点に焦点を当てた言語形式的アプローチ、断り表現における社会的・文化的背景との関係に焦点を当てた社会言語学的アプローチ、第二言語習得における学習者の中間言語語用論に焦点を当てた言語教育学的アプローチが見られた。

従来の研究は、断り表現を相手に対するフェイス侵害行為への補償行為として捉えていたため、ポライトな言語ストラテジーとしての研究が一般的であった。しかし、見落としがちであるが、断り表現の本質は互いの利益の対立と衝突に動機づけられたフェイス侵害行為として現れるインポライトネスである。今後、こうした観点からの研究が必要となるであろう。

#### 参考文献

- 生駒知子・志村明彦（1993）「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー「断り」という発話行為について－（語用論<特集>）」『日本語教育』79, pp.41-52. 日本語教育学会
- 任炫樹（2002a）「日韓断り談話における初出あいづちマーカ－」『ことばの科学』15, pp.37-64. 名古屋大学
- 任炫樹（2002b）「断りとアイ・コンタクト」『言葉と文化』3, pp.181-199. 名古屋大学
- 任炫樹（2004a）「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』6-2, pp.27-43. 社会言語科学会
- 任炫樹（2004b）「日韓断り談話に見られる理由表現マーカ－ウチ・ソト・ヨソという観点から－」『日本語科学』15, pp.22-44. 国書刊行会
- 任炫樹（2012）「日韓断り談話における不可表現マーカ－対人関係調節の観点から－」『帝塚山学院大学研究論集. リベラルアーツ学部』47, pp.33-51. 帝塚山学院大学
- 元智恩（2002）「日本語と韓国語の断りの表現の構造－指導教官の依頼を断る場面を中心に－」『言語学論叢』21, pp.21-37. 筑波大学
- 元智恩（2003）「断わる場面における「ノダ」文と「것 같다」(geos gata)文について－それらのつかない文との印象比較－（<特集>コミュニケーションの社会言語科学）」『社会言語科学』6-1, pp.153-162. 社会言語科学会
- 佐竹秀雄（2001）「研究対象の量とサンプリング」『日本語学, 日本語の計量研究法』4月臨時増刊号 pp, 74-83. 明治書院
- 清水崇文（2009）『中間言語語用論概論－第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育－』スリーエーネットワーク
- 辻新六・有馬昌宏（1987）『アンケート調査の方法－実践ノウハウとパソコン支援－』朝倉書店

- 河正一 (2013) 『フェイス侵害行為としてのインポライトネスの考察』 埼玉大学大学院文化科学研究科博士論文 9月
- 河正一 (2014) 「インポライトネスにおけるフェイス侵害行為の考察」 『地域政策研究』 17-1, pp.93-116. 高崎経済大学地域政策学会
- 藤森弘子(1995) 「日本語学習者にみられる『弁明』意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—」 『日本語教育』 87, pp.79-90. 日本語教育学会
- 洪珉杓 (2007) 「日韓両国人の言語行動の違い (9) —断りのストラテジーの日韓比較—」 『日本語学』 26-1, pp.80-90. 明治書院
- 目黒秋子 (1994) 「「謙遜型」断りのストラテジー」 『東北大学文学部日本語学科論集』 4, pp.99-110. 東北大学
- 吉田きち (2014) 「<言語とコミュニケーション>断りのメール文において韓国人日本語学習者が日本語母語話者と異なる働きかけ方をするのはなぜか—言語管理理論の枠組みを用いた事例研究を通じて—」 『コミュニケーション文化』 8, pp.44-55. 跡見学園女子大学
- 権英秀 (2007) 「「断り」表現における日・韓両言語—大学生の 'face' に焦点をおいて—」 『일어일문학』 36, pp. 23-38. 대한일어일문학회
- 김정현 (2013) 「한일 거절표현 구조 일고찰 — 의미공식을 중심으로 —」 『일본언어문화』 25, pp.143-162. 한국일본언어문화학회
- 김정현 (2014) 「거절발화시 「아이컨택」의 한일비교 — 「권유」와 「부탁」 장면에 초점을 맞추어 —」 『일본언어문화』 29, pp. 335-358. 한국일본언어 문화학회
- 金楨憲 (2014) 「断りににおける「理由表明」の韓日比較—「頼み」「勧誘」「提案」の場面に焦点をあてて—」 『일본근대학연구』 45, pp. 113-128, 한국일본근대학회
- 김정현 (2015) 「거절장면에서의 「완곡표현」 연구 — 한,일 TV 드라마를 중심으로 —」 『일본근대학연구』 49, pp. 123-138, 한국일본근대학회
- 金楨憲・崔淑伊 (2012) 「携帯メールにおける断り表現」 『일본근대학연구』 36, pp. 33-50. 한국일본근대학회
- 金潤淑 (2005) 「「依頼」に対する「断り」の述べ方—日本語母語話者と韓国人日本語学習者を中心に—」 『日本語學研究』 14, pp.19-32. 한국일본어학회
- 目黒秋子 (1998) 「「断り」のストラテジー分析—日本人、韓国人学習者、韓国人の比較—」 『日本語文学』 5, pp.137-156. 일본어문화회
- 申媛善 (2013) 「断りメールの構造と内容—日本語母語話者と韓国人学習者の比較—」 『日本語學研究』 37, pp. 53-68. 한국일본어학회
- 아오키사야카 (2012) 「한일 「거절」 표현의 대조연구 — 교재분석을 중심으로 —」 『언어과학연구』 61, pp.71-90. 언어과학회
- 元智恩 (2005) 「日本語と韓国語の断わりの構造—意味公式の配列順序の分析を中心に—」 『일어일문학』 28, pp. 69-76. 대한일어일문학회
- 元智恩 (2016) 「日韓両言語における断わりと受諾の一研究」 『일본문화연구』 60,

- pp.87-208. 동아시아일본학회
- 李先敏 (1999) 「断りの言語行動に関する一考察－韓國人と日本人の比較－」 『大邱産業情報大學 論文集』 13-1, pp. 252-267. 대구산업정보대학
- 李先敏 (2001) 「韓日大學生の断り行動の實態」 『大邱産業情報大學論文集』 15, pp. 65-77. 대구산업정보대학
- 이현정 (2011a) 「断り場面における韓日の断りへの意識－断り場面で用いられる素材や利益關係を中心に」 『동북아문화연구』 26, pp.495-511. 동북아시아문화학회
- 이현정 (2011b) 「断れた際を取る韓日の言語行動および不愉快さの考察」 『일본학연구』 33, pp. 415-440. 단국대학교 일본연구소
- 이현정 (2012) 「거절이유에 따른 부담도 및 거절전략의 한일대조 - 거절상대와의 상하・친소관계에 주목하여 -」 『동북아문화연구』 30, pp. 361-376. 동북아시아문화학회
- 임영철・김윤희 (2010) 「한일 거절표현의 구조에 대한 사회언어학적 접근」 『일본연구』 43, pp.525-540. 한국외국어대학교외국어종합연구센터 일본연구소
- 任炫樹 (2005) 「断り表現と表情の關係－日韓対照の観点から－」 『日本学報』 64, pp.161-178. 한국일본학회
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

河正一 (埼玉大学日本語教育センター非常勤講師)  
徐明煥 (東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程)